

出張日程： 2014年2月16日（日）～18日（火）；2泊2日

16日（日） 宮崎市前泊

17日（月） 午前 宮崎市フェニックス自然動物園見学 午後 幸島見学

18日（火） 午前 幸島観察所見学 午後 都井岬見学

同行者：橋本直子

1 宮崎市フェニックス自然動物園見学

チンパンジーなど霊長類飼育担当の郡健一郎氏に案内いただいた。フェニックス自然動物園では、チンパンジー・オランウータン・ワオキツネザル・リスザル・ジェフロイクモザルなどの霊長類が飼育されていた。

チンパンジーは全部で16頭、2つの群と数頭の個別飼育個体に分けて飼育されていた。給餌は生餌が主体。バナナ・ニンジン・サツマイモ・レーズン・ヨーグルトなどが与えられていた。また、マテバシイの葉枝、イタリアンライグラスなども与えられていた。固形飼料はASを1kg/日（16頭分）与えているとのことであった。また、補助的にSPSも与えられていた。サプリメントなどは与えていないとのことであった。給餌回数は5回/日。蟻塚にみたてたヨーグルトフィーダーや、固形飼料を入れたキューブ、野菜串刺し、SPSすくいなどの給餌の工夫がなされていた。体格は、霊長研のチンパンジーに比較すると総じて小さい感じがした。動きは全体的に活発で、園の中の他の動物と比べても最も動きがあり見ていて面白い印象があった。

ワオキツネザルでは、案内者の郡氏演じる給餌ショーが行われていた。クイズ形式を取り入れるなど、小さい子どもたちにもわかりやすく興味が持てるように工夫されていた。そのほか、面白かったものとして、ヤギの行進（畜舎から放牧所まで園内をヤギが自ら移動）やフライングフラミンゴショー（大型のフライングケージ内でフラミンゴを飛翔させるショー）などがあった。



宮崎市フェニックス自然動物園正門



ハンモックの上でキューブから固形飼料をとる若いチンパンジー



蟻塚フィーダーでマテバシイの葉枝を使って“インチキ”する個体。本来はトレイに開けてある小さな穴から枝を突っ込んで...が正解。

園全体の雰囲気として、緑が多く、のびやかな印象を受けた動物園であった。

2 幸島

幸島観察所の鈴木崇文氏に案内いただいた。天候はあいにくの雨で、これから海が荒れて来るとのことで急いで渡しに向かった。先日の荒天で港内に大量の砂が流れ込み、港は砂浜になっていた。幸島は過去、引潮のときに歩いて渡れたり、そうでなかったりを繰り返している聞いたが、



野菜串刺し と SPS すくい



幸島全景。港は一面の砂浜

幸島へ渡るとすぐ、岩上にニホンザルがいた。その姿にやや興奮しながら、浅瀬の中、鈴木氏のあとを追った。こどもが野球で遊ぶのにちょうどいいくらいの大きさのオオトマリの砂浜で、鈴木氏がサルを呼ぶと、ポツポツとサルが出て来た。先に島に入り調査をしていた研究者も浜へ出て来た。そのうちの一人の研究者が、メイングループが近くにいるという情報を提供してくれた。鈴木氏が激しく呼ぶと、次々と多くのサルが浜へ出てきた。最終的には 50 頭近い数になり、メイングループのほぼ全容を見ることができた。幸島には、オオトマリに出てくるこのメイングループのほかに、30 頭程度のサブグループが 1 つあり、島の北側を主な行動圏としているという。

鈴木氏は島へ渡ると、視認したサルの個体識別（出席確認）、個体間の親和行動（グルーミングなど）、敵対行動などを記録し、鈴木氏以前の過去のデータとあわせてデータベース化しているとのことであった。また、定期的に体重測定も

この風景をみるとそのことが実感として感じられた。



渡し船には砂浜に置かれた台から乗船



幸島のサルとの出会いに興奮しつつ鈴木氏の後を追った



オオトマリに集まってきたメイングループ

行っているとのことであった。バターピーナッツなどの嗜好性の高い誘因餌を用いて、体重計の上へサルを誘導しているとのことであった。誘導の際には、群内の順位を考慮するなどのコツがあるとの話だった。

通常観察時に使う誘因餌はムギであった。現在はヒトが与えるものは最小限にとどめられている。だいたいのサルが砂浜に直接口をつけてムギを食べる中、一部の個体は、ムギを周りの砂ごとつかみ取り、ムギ入り砂団子をつくり、海水でムギだけ洗いだして食べるという行動をとっていた。

どのサルも霊長研のニホンザルに比べると体格が小さくやせた印象であったが、毛艶や動きはよく、限られた資源のなかで力強く生きるサルという印象だった。

また、オオトマリから尾根をひとつ越えて、2007年に行われた一斉捕獲のワナ設置地点を見学させていただいたほか、幸島最高点にも案内していただいた。

翌日午前も幸島に入る予定だったが、荒天のため渡れず、観察所にて鈴木氏作成のデータベースや一斉捕獲作業のお話を聞いた。

3 都井岬

最終日の午後、都井岬を見学した。あいにくの雨のため、ビジターセンターうまの館の展示を、柳谷聖一館長にご案内いただいた。都井岬は、在来の再野生馬である御崎馬で有名であるが、柳谷館長いわく、ウマそのものも貴重だが、それ以上に、野生のウマを間近で観察可能なフィールドとして都井岬は価値が高いというお話であった。一般にウマの仲間には警戒心が強く、行動圏も広大であるので、野生馬の直接観察は非常に難しいという。都井岬は、限定された地域に、しかも過大にヒトを恐れないウマがいて、ウマの直接観察フィールドとしては希有なものであるようだ。ともすると、動物そのものの価値ばかりに目がいきがちであるが、フィールドの価値という視点を再認識することができた。そうした価値のあるフィールドが今西錦司先生をひきつけ、日本の霊長類研究発展のきっかけとなったのかと思うと感慨深い。

雨であきらめていた御崎馬の姿も、帰りがけに偶然1頭だけ見ることができた。また、機会があれば天気の良いときに来てみたい。

4 さいごに



浜にまかれたムギを食べる子ザル



砂団子を洗ってムギを食べるサル



雨の中、1頭の御崎馬がゆっくり歩いてゆく

今回の出張のチャンスを与えてくださった教員の先生方、また出張手配、業務調整など各方面でお世話になった職員の方々に感謝いたします。